
星と雲をなぞって

赤眼鏡の白チョーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星と雲をなぞつて

【著者名】

ノーノード

【作者名】

赤眼鏡の白チョーク

【あらすじ】

変わりのない日常。いつもの時間。だけど、気がつけばこんな世界もあった。ほのぼの学園ストーリーです。皆過去があつて、でもそれを乗り越えて生きている。

雨が降りそうだ

嫌いなのは鏡に[写]った自分

周りの流れに合わせることしかせず、恐がって何も言わない
だから、ずっと何も変わらないんだ

これからも何も

「じゃあやりたいやつあつたら言ひてー」

櫻木翔太の声がクラスに響くが、クラスメイト達は何人かで集まつ
てこそこそ話すだけ。

返答の声がないのに、教卓に立つ翔太はこつそり溜息をついた。
毎年、こつなるよな。

今年も学校祭の時期がきた。

翔太のいる高校も普段の厳しさを緩め、教師も力を抜く。
好きな人と近づけるチャンスに生徒たちも生き生きする。
ただ。

ただ、難解がある。

毎年毎年クラスの出し物が決まらないのだ。
うだうだ悩み締切寸前まで決まらないことなどじょっちゅう。
クラスも、持ち上がりのせいで毎年意見は出ない。

どうしようか。

ざわつくクラスを前に早くも意氣消沈してきた。

第一、何で俺が先生からの指名だからって委員長やんなきやいけねえのか。

また溜息が出そつになつた時。

「はいー」

響く元を見れば、チャラ男こと水内羽住が手をあげていた。
「うわ、水内か…」

染めましたと言わんばかりの茶髪と両耳あいているピアス。逆ナンパされることもある整つたイケメン顔。
笑うとえくぼが出来るのが女子は可愛いらしい…よつてついたあだ名はチャラ男。

「え、何。いいんちょー放置プレイ?ちょっとー」

口を尖らせ、羽住が手を大きく振つたのをみて、ようやく翔太は気づいたように声をだした。

「…あ、悪い。えと、水内…何かやりたいやつあるの?」

「おう、やつぱ学祭つつたら、劇じやね!?」

「…劇?」

「んー」

ん、と言葉と共ににつこりと人懐つこやうな笑顔を見せると、数人で固まつていた女子から黄色い声援が送られ、男子からは同意するような「いいな!」という声が聞こえはじめた。

何と単純我がクラス…。

クラスを見渡して賛成意見が多そうなのを確認し、羽住に聞いた。
「やつぱ三年だし、ラストだし。思い出に残る系にしたいじゃん」
「…ちなみに何の劇か、とかは考へてる?」

「それがさ、何かー前にやつたやつとかやんの、つまんねーじゃん
「うん」

「やつぱー!」はオリジナリティーを出すべきだと思つんだよね」

「うん」

「だからこのクラスオリジナリティーな劇やろーゼー。」

立ち上がった羽住は、効果音をつけるならキラキラと輝いた目でクラスを見た。女子も男子も羽住に期待の目を返す。

ああ…クラスの奴らが羽住のキラキラ攻撃にやられていく…。

翔太は羽住が苦手だつた。以前の体育祭でも羽住がクラスをまとめ、翔太は書類に班分けを書いただけだつた。

あいつの周りには人が集まるんだ…。

嫉妬してしまう自分が嫌で、翔太は早々に学校祭の用紙に決まつたことを書き込んでいく。

「いいんちよー、そんな暗い顔すんな！ちゃんと脚本家も考えてるんだぜ、俺！」

自分の胸元に親指を立ててポーズを決める羽住を、やや冷めた目で見つつ聞き返した。

「…脚本家？」

「そ…じゃじゃーん！ 雪莉たんー」

翔太が見たのは羽住の斜め後ろに座る、越智雪莉の片腕を掴みブンブンと楽しそうに手を振らせる羽住と、目を見開き驚いて固まつた雪莉の姿だつた。

まだ空は曇っている

嫌いなのは人形のような自分

言われたとおりにしか動けないくせに、誰かに逆らいたくな
る従つて生きていれば楽なのにどうしてだらり

涙が止まらない

何の音のしない朝の学校が越智雪莉は好きだった。

誰よりも早く来て、誰もいない空間で息を吸う。

まるで自分以外いないうな錯覚が幸せだった。

ガラツと音をたてて教室を開けた雪莉は、自分の席につきノートを広げる。

朝は少し寒いのでシャツの上に着たカーディガンを体に寄せ、寒さを凌ぐ。

下を向くと、さら、と流れてきた黒髪を掴み頭の上で結んだ。雪莉の長い髪ではポニーtailでも肩まである。

「…そろそろ切らうかな」

邪魔になってきた髪を弄りつつ時計をちらちらと気にする。

ノートを広げてはいるが、ペンシルを掴んだまま何も書かない。

針が七時半を過ぎた頃、雪莉は自分の席のすぐ横の窓をゆっくりと開けた。

朝の寒気と、どこか遠くで鳴く鳥の声と。
歌が、流れてきた。

雪莉は朝の学校が好きだった。

彼が歌の存在を教えてくれた頃から。

「今日は洋楽だ…」

窓縁に腕をのせ、その上に顔をのせて目を閉じる。

微かに聞こえて来る音に全ての神経を集中させるよつに。

歌はいつも朝の七時半前後から始まり、一曲一曲で終わる。

曲はバーノードもあればノポップ、ロックからアニソンまで色々だ。

雪莉は特に水曜によく聞くカントリー・ロードが好きだった。

歌が終わり、ゆっくりと体をあげ、じつと天井を見た。

数分過ぎただろうか、ガラツと新しく生まれた音と共に人が入ってきた。

「…お、おはよう」

驚いた表情で樺木翔太は雪莉を見て、吃るよつに挨拶した。

「おはよう」

「誰もいないと思ってた」

翔太は苦笑しながら雪莉の一いつ前の列に座り、振り返る。

「朝早くから勉強？」

「昨日の。脚本考えよつと思って」

「ああ…大変だね」

うわ、と嫌そうに顔をしかめた翔太に雪莉は内心笑っていた。だが、顔にはでない。出せない。

「話とか、決まってるの？」

「…なんとなく。」

俯いて、真っ白なページを指でなぞる。嘘だ。本当はまだ何も決まっていない。

昨日水内は恋愛物の劇がいいと言つていたが、自分に恋愛物が書けるとは思わない。

そのせいで昨日から一ページも進まなかつた。

「なんか、ごめんね」

え？

咳くような小さな声に反応して前を向くと、後ろ姿の翔太がいた。

「本当はさ、委員長の俺が手伝えたらいいんだけど

…そんなこと、ないよ。

「そういう国語力ないし」

私もそんな力ない。

「想像力も乏しいからなー」

振り返った翔太の顔が、苦笑いをしていて。
また小さく、ごめんなつて聞こえた声に。
心が痛くなつた。

櫻木君のせいじゃないよ。その気持ちだけでも嬉しいよって、声
にだして言えたらしいのに
自分の気持ちを伝えるだけなのに、口がくつついたように開かず雪
莉は苦しそうに顔をしかめた。

「あれ、一人ともめちゃ早え！」

ドンッと音と一緒に、水内羽住が朝から笑顔で教室に入ってきた。
大きな音に雪莉は肩を驚かせる。

「いいんちょー、雪莉ん、おはーー！」

「…おはーつて古くないか」

羽住は少し前に流行つた挨拶をして雪莉の斜め前の席に座つた。
「水内こそ朝早いじやん

「隊長！朝練でした！で、眠かったんで教室にきたでありますー」

「つまりはサボりか」

「やん、いいんちょー厳しーいー」

「…水内キモイ」

体をくねらせて喋る羽住に翔太は呆れた目を向ける。

だが、どこか話すのが楽しそうな様子に雪莉は驚いた。

羽住が今までの空気を、ガラツと雰囲気を変えてしまった。

水内君はまるで、白の魔法使いだ。

雪莉は、幼い頃に読んだ絵本の登場人物を思い出して、はっと閃いた。

空が晴れはじめた

嫌いなのは「」まかし続ける自分

本当の気持ちを伝えず、誰をも「」まかす

周りは笑うから俺も笑う

けど俺の本当の気持ちがどうだろ？

「だからね、羽住君の事前から好きなの」

「…あー、ありがと。でも「」めんね。付き合つとか考えられないんだ」

「…つ」

「……」「めんね」

渴いた音と走り去る音がして、後からじわりとした痛みが伝わり始めた。
音が響いていく廊下の先に去っていく後ろ姿を見ながら、ため息しかでなかつた。

「あーー」

しゃがんだ水内羽住は、ワックスで固めた髪をがしがしと搔いた。
「痛いなあ…」

叩かれた頬を触りながら廊下の壁に腰掛ける。

羽住に告白する子達は皆、普段から優しくしてくれる羽住に、まさか断られるとは思っていない。

過去に自分の事が好きなら言つてしまいとまで言われたことがある。
女の子って難しいなー…。

断る度に増える苦労に、どつと疲れがやつてきた。

「…雪莉ん、いつまででござりで固まつてゐの？」

「つ」

小さく息を吸い、少しだけ空いたドアをゆっくり開け、越智雪莉が申し訳なさそうに出てきた。

「ごめん、なさい。盗み聞きするつもりじゃ…なかつたんだけど」「いいよいよ。気にしてないしー」

雪莉は居心地悪そうに、そわそわしながら羽住を見る。

「……………痛い？」

「え？」

ぼそっと呟かれた声を聞き返せば、じつと雪莉が羽住の叩かれた頬を見ている。

「ああ、何見てるのかと思つたらー…そんな痛くないよん。叩かれたのも初めてじゃないし」

「そう」

羽住が改めて雪莉を見れば、両手に大量の書類を抱えていた。そして雪莉が出てきた教室は、

「…図書室？」

「つ！」

雪莉はびくつと肩を踊らせ、羽住は顔に手を添え首を傾げた。

「雪莉ん、図書委員だっけ？」

「あの、…」

「およよ？」

何故か突然慌てはじめた雪莉に、羽住が落ち着くよつ声をかけよつとしたとき。

ばさばさつ

「あー、落ちちゃつた」

雪莉が抱えていた書類が床に散乱した。

「雪莉ん、大丈夫ー？」

「あ、あのーいいからつ…」

必死に自分の方に寄せよつとしている書類を一枚掴めば、そこには

紙限界まで書かれた文字。

「……お？」

「…………」

真っ赤になつた顔を黒く長い髪に隠して彼女は黙つた。

「面白いじゃんー雪莉んにこんな隠された才能があつたとはねー」

「…………」

「……ねー雪莉んいい加減、会話してくれないと泣いちゃうよー」

「…………」

雪莉から奪つた、基、読ませてもらつた書類をまとめて、隣に座る雪莉を伺えれば俯いたままだつた。

大量の本の山に囲まれた司書室で雪莉の小説を読み始めてから、一言も話してくれない様子に羽住は困つたように笑つた。

なるほどねー、応募する為に司書室にいる朝宮先生に会いに來たのか…

真っ赤になつた雪莉の話では、小説家を目指し時たま小説を応募していく、誤字脱字のチェックを朝宮先生にしてもらつてているとのことだつた。

「夢がさ」

「…………？」

「夢があるのは、いいことだよ」

羽住は小説を指でなぞり、寂しそうに笑つた。

会話がなくなり静かになつた司書室で、雪莉はじつと羽住を見た。外を眺めている羽住はクラスで笑う時とは違い、まるで一人ぼっちの様な雰囲気を感じた。

「そだ！」

ぱんつ、と手を合わせた軽快な音と共にキラキラと輝いた目で隣を見ると、雪莉は嫌な予感しかしないといつた表情で見返した。

「今度の学祭の劇の脚本書いてよー！」

「は？」

「うんうん、いい案だ。こんな面白い話が書けるんだもん…」

「み、水内ぐ…」

「はい、雪莉ん。」れありがとね一本当面白かつた。」

「…あ、うん」

「俺これから真宮に学祭の相談していくからーじゃつー。」

じや、の声と共に同書室を飛び出て廊下を走つていいく姿に、脚本の話を断りそびれた雪莉は、ただ啞然としながら見送るしかなかつた。この日から、雪莉の中で羽住は、クラスの女子の名前を暗記してい る変わつた人という認識になつた。

まあ、顔をあげようか

見つけたのは、認めてくれていた人と、鏡の向こうにいた本当の自分

「櫻木ー、生徒会から書類預かった」

「机の上置いといて」

「櫻木君買い出し行きたいんだけど、いい?」

「何買うかと予算、黒板のメモに書いてくれれば大丈夫」

「いいんちょーー」

「…水内、お前は仕事しろ」

廊下は人が絶えず、どの教室を見ても生徒達は慌ただしく動いている。

櫻木翔太のクラスも一ヶ月前を切った学園祭の準備に追われていた。特にクラス委員長の翔太は、提出書類のチェックや会議に引っ張り廻である。

そつと横目で窺えば、教室の片隅でペンを走らせている越智雪莉の姿があった。

問題があるとすれば、脚本の最後、舞台のラストシーンが決まらないのだ。

雪莉は何枚か書いては、読み直し紙を捨てるのを繰り返していた。そのせいで雪莉の机の周りには捨てられた紙が山を作り、近寄りがたい異様な雰囲気を醸し出している。

「委員長、これ越智さんの追加用紙」

「ありがと真宮」

「おー、真宮お疲れさん」

「…お前は働け」

翔太の正面に座る水内羽住に真宮は冷めた視線を寄越したが、羽住は口笛でごまかしながらクラスを眺めている。

「主役だからって何もしなくていいって訳じゃねえぞ」

「わかつてるとーだからセリフを覚えようとしてんじゃないか」

「委員長の邪魔だけはするなよ」

「ひでー！俺がいついいんちょーの邪魔したよ！？」

「お前の存在が邪魔だ」

鬼ー！悪魔ー！、と叫ぶ羽住は今回の学園祭での劇で主役をやることになった。

劇は、ある国の王妃様が死んでしまった悲しみで話せなくなつた姫の為に王様が国の魔法使いを呼び、姫の悲しみをなくすように命じ魔法使い達はあらゆる方法で姫を喜ばせようとする話だ。

羽住は魔法使いの一人、白の魔法使いの役で姫の悲しみを取り除く役だ。

水内には適役かも。

翔太は台本のホチキス止めをしながらそんなことを思つた。

「でもマジでセリフ多いよねー覚えられるか不安だわ！」

「頑張れ？」

「ちょ、真宮ん冷た！しかも何で疑問形なのー！」

「委員長はあんま無理すんなよ」

「…え？」

突然真宮から話題をふられ、翔太は驚いた。

「委員長はクラスの為に頑張りすぎだから。これ以上頑張んなくていいぞ」

「そーそー、台本の誤字チェックとか、舞台の打ち合わせとか無理ちゃ疲れるよん」

「あ、う、うん。」

「ああ、どうしよう。顔にやけてないかな…

嬉しくて、緩む顔に入れるが、頑張りを褒められるのが何だかむず痒い気持ちで、翔太は見られないように俯いた。

「櫻木がクラス委員やるのは正直意外だつたけど、良かつたよ」「しょーた君は出来る子だと思ってたよー」

「…お前に言う筋合いないだろ」

「あああああギブギブウウ！真宮痛い痛いー頭ぐりぐりはやめて！」

「痛くないって」

確かに、クラス委員に命名された時は本人も無理だと思っていた。だが意外にも、自分のことを認めてくれていた人がいたことを改めて知る機会となつた。

「委員長、助けてー」

教室のドアを開けたクラスメイトが、書類片手に困り顔で翔太を見ている。

それに答えるべく、イスから立ち上がり助けを求める輪の中に入つていつた。

その彼の背中は、何とも頼もしい姿だつた。

星と雲をなぞつて

見つけたのは、優しい歌声と進もうとする自分の影

女王様が死んでしまい、王女は悲しました。

たくさんの涙を流し、誰とも話をしなくなってしまったのです。

空を流れる雲も花を旅する蝶も皆、王女を心配しました。

やつと部屋から出てきた王女はその美しい声が出せなくなつてしましました。

王は大変困り、国から魔法使いを呼び出しました。

王女の美しき声を取り戻した者に望むものをやろう。

魔法使い達は王の言葉に頷き、次々と王女の為に魔法を使いました

人のいない図書室で越智雪莉はシャーペンを手放した。

昔、よく母が読んでくれた絵本を元に書いた脚本は無事、クラスメイトに受け入れられた。

まだこの絵本を読んでくれていた頃の母は、優しかった気がする。雪莉の兄が8歳の時、交通事故で亡くなつてから母は兄にさせたことを求めた。

ピアノも塾もバイオリンも。

そして母は言うのだ。

『和の方が上手だった』と…。

握った手に爪を食い込ませ、泣きそうな感情が落ち着くのを待つ。ふ、と、つけている腕時計の時間を見て、立ち上がる。

「ピアノ教室…」

これから帰らなければ間に合わない。

周りの用紙を書き集めてカウンターを見れば、図書室を開けてくれた朝富先生の姿はなく、仕方なく帰る旨を書き置きしておく。そして玄関に続く階段を降りようとした所、教室に書きかけの用紙があることを思い出し慌てて教室へ走り出した。

「……？」

教室に近付くにつれ、何かがどぎれどぎれに聞こえてきた。その音が雪莉の教室から聞こえてくることに気づき、足音を消してゆっくり近付く。

教室のドア上部にある窓から覗けば、櫻木翔太が窓際の席の机に座っているのが見えた。

聞こえてくるのは、歌だった。

そつと開けたドアから体を入れ、声がよく聞こえるように扉を閉じる。

翔太は入口からは反対を向いているため気づかないまま歌い続けていた。

聞き続けていた、歌声がそこにあった。歌声が止んで翔太が鞄を取りうと、後ろを向いた時雪莉に気づき驚いた。

「あ、れ。越智さん」

首を傾げ不思議そうに雪莉を見るのも当たり前で、生徒達が帰つてから一時間も過ぎていたからだった。

雪莉は何も言わず、俯いていた顔を上げ少しだけ笑った。

「……いい、歌だつたよ」

「え、」

「いい歌」

「あ、ありがとう…」

何と言つていいかわからず戸惑う翔太だったが、歌つていたのを聞かれた恥ずかしさもあり口を閉ざしてしまつ。

「そういえば」

翔太は歌から話を変えようと呟るい声を出した。

「劇の脚本凄かつたよ。本当ありがとう。」

「…うん」

「水内達も気に入つてたし、学年優勝できたらいいんだけど」

「そうね」

「あーえっと…あ、俺あのセリフが好きだな」

翔太はそう言つと、魔法使いの棒を振るしぐさをしながら言つた。

「王女よ悲しみはとてもわかります。ですが、その美しき声が聞けず悲しむ方がいるのです」

雪莉は台本通りに首を振つた。

白の魔法使いが王女に悲しんで尚、前向きに生きてほしいと励ますシーンである。

雪莉は密かに王女に自分の影を写していた。前に進めず自分という世界から出られない少女。

「…王女、私も悲しい。王女と話ができず笑顔を見ることもできな
い。人は死ぬのです。ただ大切なのは生きてきたことなのです」

雪莉は翔太が劇一番の長セリフを暗記していくことに唖然とした。

「…貴女に私の魔法を。星と雲が流れていく時の中で貴女の悲しみ
が消えていきますように」

翔太は夕暮れの橙の光を背に浴びながら、雪莉に魔法をかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7398x/>

星と雲をなぞって

2011年11月11日18時16分発行